

独歩「忘れえぬ人々」の指導と反省

—— 読後感想文の分析による ——

大 西 道 雄

はじめに

ひごろ、生徒とともに教室で文学作品を読解鑑賞していく際に、いつも心もとなく、もどかしく思うことがある。それは、生徒とともに歩きつつ、立ち止まりつつ読み味わおうとしながら、結局は、強引に自分の用意した道筋に引き入れてしまうことである。生徒が作品を読み、個々に胸の中に芽生えさせたものを、生徒がお互に成長を促しあいながら、指導者に養われて、ぐんぐん枝葉を茂らすということにならぬものか。

そこでこうした指導をするためには、生徒が実際にどのような鑑賞活動を営んでいるかを分析し、その要因をとらえて、指導の手を加えていけば、効果があがるのではないかと考えたわけである。鑑賞活動はあくまでも個人の心の中で営まれる主体的精神活動であるから、何よりもまず、個人の心の中に感想の発芽を促さねばならぬ。こうした観点から、感想文を書かせ、そこに鑑賞を深めるいくつかの契機を掘り起して、学習活動の柱をたて、それをもとに学習

を展開するという授業形式を幾度か試してみた。

ここでは、最近実施した授業において書かせた感想文を題材として分析し、反省し、更に次の授業への構想をたててみたい。

実施した小説学習指導のあらまし

授業は、次の要領で実施した。

△実施時期▽昭和三十七年六月下旬

△授業学級▽一年生普通科C組47名全体的におとなしいクラスで、

比較的読書好きである。学力はやゝ劣る。

△教材▽日本書院・国語一・單元明治の浪漫主義の中の「忘れえぬ人々」。四国三津浜の琵琶僧の話が省略されている。

△授業の展開▽生徒と話し合つて、みんなの感想をもとにして学習を進めることにした。生徒に感想文を書いてもらい、指導者がそれを整理し、問題点を発掘し、それをもとに学習を進めることにした。

(第一時) 前時に作品を読んでくことを予告しておいたのだが、時

間のはじめに、今一度静かに通読させ、西洋紙四切大の紙を与えて、15分で感想記述をすることを指示した。感想文回収後、作品の段落構成を生徒とともにまとめた。

(第二時) 第一次感想の問題点を提示して、この後の学習活動の筋道を確認した。感想文には、さまざまな段階の感想が記述されていたが、一番多かったのは、「忘れえぬ人」とはいかなる人であるかということをめぐる感想であった。(くわしくは、「感想文の分析」で示す。)

そこで、「忘れえぬ人」とはいかなる人をおいのかということをお、作品に聞くということをお、この時間の学習のねらいとしてたて、説解作業にはいった。段落構成のまとめを手引きに次の部分を問題にとりあげた。

「親とか子とか、または、朋友知己そのほか自分の世話になった教師・先輩のごときは、つまり単に忘れえぬ人とのみはいえない。忘れてかなうまじき人といわねばならない。そこで、ここに恩愛の契りもなければ、義理もない、ほんの赤の他人であって、本来をいうと忘れてしまったところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人がある。世間一般の者にそういう人があるとは言わないが、少くともぼくにはある。おそらくはきみにもあるだろう。」

「要するに、ぼくは絶えず人生の問題に苦しんでいながら、また自己将来の大望に圧せられて、自分で苦しんでいるしあわせな男である。」

そこでぼくは、今夜のような晩に、ひとり夜ふけて燈に向かっていると、この生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催し

てくる。そのとき、ぼくの自我の角がはきりと折れてしまつて、なんだか人なつかしくなってくる。いろいろの古いことや友の上を考えたす。そのとき油然としてぼくの心に浮んでくるのは、すなわちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見たときの、周囲の光景のうちに立つこれらの人々である。」

この部分の説解を通して、「忘れえぬ人々」が「忘れえぬ人」となる条件を整理して、次のような項目をたてて、「忘れえぬ人々」のそれぞれにあたって、考えることにした。

1、「忘れえぬ人」に会った時の大津の境遇あるいは状態

2、「忘れえぬ人」に会った時の大津の心境

3、「忘れえぬ人」の状態

4、「忘れえぬ人」のいた周囲の光景

(第三時・第四時・第五時) 瀬戸内の島陰の男、宮地の若者、亀屋の主人の、それぞれの場合について、上記のことを適用して考えた。整理していく過程で、解釈作業を交え、先に書いてもらった感想文を適宜紹介しつつ、まとめていった。

この後に期末考査があり、考査終了後感想文を書かせた。これは、第一次感想文と比較して、どの程度感想が深化しているかを評価することを考えて、行なったものである。

特に第一次感想文のことは、ふれずに、みんなと読み終わって後、心の中に残っている想いを書いて下さい、ということを書いてもらった。用紙は、西洋紙一枚を配布した。

感想文の分析

△第一次感想要素の分析▽

第一次感想文を分析し、各感想文の感想要素を拾い出して、分類したものである。なお、ここに引用した感想は、筆者が、できるだけ原文を生かし、やむをえぬ場合に、原文の意味を損わぬよう縮約したものである。

〔A 作品を享受し、追体験しようとする段階にあるもの〕

(1) 全体的印象を述べたもの

(男) イさみしい感じがする。(2)

ロわびしいさみしい感じがする。

ハ心にしみるような感じだ。

ニしみじみした感じがする。

(2) あらすじをまとめたもの

(女) ホ「忘れえぬ人々」を説んでいると淋しい感じがある。

(男) イ大津という歌人が歌をつくってあるいている時のある箱での話。

ロ大津が忘れえぬ人について語ったものである。

ハ忘れえぬ人々の、それぞれの話の書かれている。

ニ大津が人なつかしく思う時、同感の人の出現をのぞんでい
る、ということが書かれている。

ホ大津が溝口で自分の忘れえぬ人々について、秋山に語る話で
ある。

(女) へ大津は、日本中を旅行して、その途中印象に残った人々を忘
れえぬ人として語ったものである。

(3) 作品の特定部分をとりあげて、自己の解釈を示したもの

イ「忘れえぬ人」と「忘れてかなうまじき人」との区別につい

て、作中の具体にもとづいて解釈したもの(2)(1)(0)

(男) (女)

ロ「忘れえぬ人」となる理由について自己の解釈を示したもの
(2)(1)

ハ「忘れえぬ人」となる条件について自己の解釈を示したもの
(3)(1)

ニ「忘れえぬ人」をどんな時に思い出しているかについて述
べているもの(1)(0)

ホ「秋山」が「忘れえぬ人」にならなかった理由についての解
釈を示したもの(1)(1)

へ「忘れえぬ人」とはどういう人かということに解釈を示した
もの(0)(1)

(4) 作品の特定部分について疑問を提出したもの

イ「忘れえぬ人」ができるのは何故か、よくわからない。

(1)(1)

ロ「忘れえぬ人」と「忘れてかなうまじき人」との区別がは
きりしない。(1)(2)

ハ「秋山」が「忘れえぬ人」でなかった理由がよくわからな
い。(2)(3)

(5) 登場人物に対する印象・感想を述べたもの

(男) イ秋山は友だちになり易い人だ。

(女) ロ大津の第一印象はたくましそだったが、読み終わって青白
くひ弱そうだったので、興味を失なった。

ハ忘れえぬ人々は、何か平凡な感じである。

(6) 背景についての印象感想を述べたもの

(男) イ情景が豊かで考えさせるものがある。

情景描写が多い。

ハ自然描写が絵画的である。

ニ阿蘇山の風景描写が美しい。

(女) ホ九重嶺と阿蘇山との間の一大窪地は世界最大の噴火口らしく数里にわたる絶壁がたいへん美しい光景である。

ハ阿蘇山がくわしく雄大に描かれているのが、印象に残った。
ト風景がくわしく描かれている。

(8) 自己の体験に照して、作品の世界に同感しようとする姿をみせているもの

(男) イ自分にもこんな忘れえぬ人があったらと思うが、ないが残念である。

ロ自分にも忘れえぬ人があるだろうか。

ハ自分も両親にはなれていた時に孤独感を感じ、人恋しくなったことがある。

ニ私にも忘れえぬ人がある。(忘れえぬ人の体験談がつづく。)
ホ自分にもこれと同じような体験があるのでおもしろく読んだ。

(女) ハ私にもこんな体験があるような気がする。
ト私たちの日常によくあることなのでよくわかる。

チ私にはこんな体験がない。(3)

リ自分にもこんな忘れえぬ人があるだろうか。

又私にも忘れえぬ人がないことはないが、やはり教師・先輩といった人たちである。

ル私は体験が少ないので、よくわからない。

(B) 作品を通してとらえた作者に対する感想を述べたもの)

(1) 作者の性質および能力の傾向について述べたもの

(男) イ作者は感覚がすどく、感受性の強い人だろうか。

(女) ロ作者は美しいイメージをもち、孤独な人ではないだろうか。
ハ作者は孤独で純心で、自然にひかれていいるから、素的な小説が書ける。

(2) 作者の物の考え方の傾向について述べたもの

(男) イ自分を見つめ、運命について考えている人である。

(3) 登場人物と作者(独歩)との関係について述べたもの

(女) イ大津と作者とは性格的に共通点が多いのではないかと考えた。

ロ主人公(大津)は作者自身のことを書いているのではないかとと思われる。

(C) 作品を批判的にとらえたもの)

(1) 全体的に述べたもの

(女) イこの作品はおもしろくない。

(2) 作品の構成について述べたもの

(男) イ秋山と大津が一つ宿に落ち合って語り合うという構成がおもしろい。

ロ全体として盛りあがりがなくおもしろくない。

ハ会話体で語りかけられているので、次にひかれて読む。

(女) ニ初めの方はキパツに書かれており、あとの方はシンミリと書いて統一がない。

ホ最後に「秋山でなかった」と書いてあるところが、注意をひき、考えさせられた。(2)

(3) 文章表現について述べたもの

(男) 自然描写がすぐれた作家である。(2)

□風景描写が上手である。

(女) 自然描写がたくみである。

□調子がゆるやかで、情景が頭にうかぶ。

□ホ文章は簡潔ですっきりしている。

△第二次感想要素の分析▽

第一次感想の分析と同様な方法で分析して分類したものである。

〔A 作品を享受し、追体験しようとする段階にあるもの〕

(1) 全体的印象を述べたもの

(男) 全体がもの寂しく落ちついた文である。

(女) 全体的にももの寂しい。

□おもしろいというより心うたれる作品である。

□全体的にこういう感じの物語が好きです。

(2) あらすじをまとめたもの

(男) 三人の忘れえぬ人についての話をまとめ、理解できた部分と理解できなかった部分とを示したもの

(3) 作品の特定部分をとりあげて、自己の解釈を示したもの

(男) 「忘れえぬ人々」を何故忘れえぬのか、ということについて分析し、授業での理解をまとめて、常識的理解を一步深めた

□ という感想を述べたもの(6)

□ 「忘れえぬ人」とはどういう人かについて、授業にも

□ とづく解釈を示したもの

□ 「忘れえぬ人」と「忘れてかなうまじき人」との区別が常識

□ 的なものと違うという感想を述べたもの

□ 二亀屋の主人が忘れえぬ人であったわけを、授業にもとづいてまとめたもの(2)

□ ホ亀屋の主人が忘れえぬ人であったわけを「大津が自分が孤独を感じている時に寂しそうな人を見ると自分も同じだと考えるから」ととらえたもの

(女) 「忘れえぬ人」となるのは、主人公のその時の気持と、「忘れえぬ人」のいる風景とが一つにとけ合った場合であると解釈したもの(8)

□ ト亀屋の主人が「忘れえぬ人」になったわけの解釈

(4) 作品解釈上の疑問を提出したものを

(男) 三人の「忘れえぬ人々」の間には何か共通点があるように思うのだが、よくわからぬ。

□ 最後の部分で、秋山でなく亀屋の主人が「忘れえぬ人々」の中に入ったことが、よくわからぬ。(2)

(女) 八生の孤立を感じた時に忘れえぬ人を思い出すわけが、疑問として残った。

□ 二大津が「忘れえぬ人々」を書いたのは、何故か。思い出すためなら、「忘れえぬ人」だから書かなくてもよい筈だ。

(5) 登場人物に対する印象・感想

(男) 大津は神祕質な人間である。

□ 祖父を連想して、亀屋の主人をなつかしく思った。

□ 大津にも、亀屋の主人にも自分と同一化して他人を理解しようとする考え方があがる。

(6) 背景についての印象・感想

(男) 情景描写は印象に残る。

□ 「忘れえぬ人」と背景が結びついている。
ハ風景が人物とよく調和していて、自分も行ってみたいくなる。

(女) ニ自然の美しさに感動した。

ホ寂しい風景とその中に人間がいなかったら、この作品は成立せぬだろう。

(7) 自己の体験に照らして、作品に同感しようとするもの

(男) 大津の性質と自分の性質とが共通点があるので、大津の感じ方に共感できる。

□ 「忘れえぬ人」について、体験がないのでわからぬが、想像できるような気がする。

ハ生の孤立感についての体験談

ニ「忘れえぬ人」について音戸での体験談

ホ自分には「忘れえぬ人」がないから、ピンと来ない。

(女) ハ私には大津のような体験があるからよくわかる。

ト「忘れえぬ人」についての二つの体験談

チ自然美に感動した体験談

リ自分は「忘れえぬ人」をもっていない。人生に苦しんでいないからだろう。

(ハB 作品を通してとらえた作者に対する感想を述べたもの)

(1) 作者の性質および能力の傾向について述べたもの

(女) 作者は神経が細かく、孤独な人である。

□ 作者は物を深く見る目がある。

(2) 作者の物の考え方の傾向について述べたもの

(男) 自然の広大さに人間の弱小さを感じる作者に共感した。
(女) □ 自然に対する作者の愛情を感じた。

(ハC 作品を批判的にとらえたもの)

(1) 作品の構成について述べたもの

(男) 普通の小説のようではなく、「忘れえぬ人々」を中心に自然描写が多いので、おもしろくなかった。

(女) □ 盛り上がりがなく、ただだらけている。

ハ最後に「秋山でなかった」とあるのが効果的である。(2)

(2) 主題について述べたもの

(女) イこの作品で何を言おうとしているのか、主題が明確でない。

□ 博愛・同情の念を持って生きることを説いたのが、この作品のねらいである。

(3) 登場人物に関するもの

(男) イ男の意地が捨て切れなくて、人生の問題に苦しむ大津におおらかな気持をもと忠告したい。

□ 大津と秋山が当代の大家を批評しているのは、よいとも悪いとも両方言える。

ハ作者は親友がなければ、親友を作ったらよい。作者はかわいそうだ。(大津と作者を混同している。)

(女) ニ大津は自分をふしあわせな男であると考えているが、私はこんな考え方の人はきらいだ。

(4) 文章表現に関するもの

(男) イ静かで寂しい文に阿蘇を入れて明るくしている。

「自然の中の「忘れえぬ人」を的確に描写している。

「自然描写がうまい。

「主人を中心とした魚屋の雰囲気描写がおもしろい。

「ホ大津と秋山の話し合いの場面で心理描写があつたらよいと思ふ。

(女)へ綿密な写生描写である。比喩が効果的に用いられている。

ト状態・光景がくわしすぎる。

チ「秋山ではなかつた」の部分の文章が歯切れがよく、好きだ。

以上分析整理してきた感想要素から考えついた、幾つかの事柄を述べてみたい。

分類基準の第一に「作品の享受段階にあるもの」という項目をたてたのは、次のような理由による。感想要素の分析過程で、全体的印象を述べて感想記述にはいるもの、あらずじを書いて感想記述にはいるものというのが、二、三にとどまらずあるということに気づいた。これは、読者が、自己の受けとめた作品像をおおまかに思い描くことから、感想を分化していこうとしているのではないかと考えたのである。ここから出発して次のような仮説をたててみた。

読者は作品を自己の享受能力に従つて受け入れていくのだが、その際、作品のイメージを描くのいくつかの段階があり、おおまかな印象の把握から、あらずじ把握という、やや作品構造に立ち入ったとらえ方に進み、更に細密なイメージ構成のために部分の解釈にはいり、人物・環境・事件等について理解を深め、疑問をもち、全体的に構造的に作品像をつかもうとする。

当然主題を考えるところまで進むのだが、主題をつかむことは、

作者を意識して、作品を通して作者に聞くことになる。この段階で読者は、作者がどんな考えで、どのように作品を書いているか、を考へるようになっていくであろう。

こうした考えから第二に「作品を通してとらえた作者に対する感想を述べたもの」をとりあげたのである。ここまでは、あくまでも読者の主體的な作品享受ということなのであるが、主観的享受は一段と高まったところでは、作品の客観的価値評価にまで進む筈である。それが、どのようにあらわれているかを考へてみようとしたのが、第三の「作品を批判的にとらえたもの」という項目である。

分類の結果は、前掲の通りである。分類のしかたに考えちがいのある所が多くあるだろうと思ふのであるが、一応、この結果にもとづいて考察を進めることにする。

「作品を享受し、追体験しようとする段階にあるもの」における問題について述べよう。まず、「あらずじをまとめたもの」についてみると、第一次感想にはかなりみられるが、第二次感想では、ただ一例だけである。これは第二次感想では「あらずじ」把握程度の浅い理解から、かなり深化していることを示すものと思われる。が、「あらずじ」把握的感想にも浅いなりに一つの萌芽をもっていることを注意せねばならない。前掲「第一次感想要素の分析A(2)」によつてもうかがえると思ふが、一例をあげよう。

作者国木田独歩は無名の文学者大津弁二郎を通して、瀬戸内海通いの汽船で見た寂しい鳥かげの小さなあさつてゐる人(影)や、熊本から大分へと九州を横断した時の二十四・五と思われぬ屈強な若者が手綱を引いてはくらの方を見向きもしないで通つて行つた、夕月の光を背にした端顔、たくまじげなからだ、

藪口の鳥屋の主人の姿など、自然のまま自分にかんじようせずにいきていく人、それを時によりなつかしくすぎさつた事柄を思い出させる。このような人を「忘れえぬ人々」と思う。(S・男、傍線筆者)

全く文脈で定かでない文章であるが、線部分には、主題把握への志向がみられる。あらずし把握という感想表現形態は、きわめて初歩的段階とはいうものの、そこには、作品に対する読者の姿勢があらわれていることがあることを注意せねばならぬ。しかし、それだけである。きわめて低い次元にある感想といわねばならない。これをどう切り崩していったらよいか。

第三に考えてみたいのは、作品の世界と自己の体験との照合である。これは、一次二次ともに顕著にみられる傾向であるが、自己の体験に照合することによって、客体的な作品の世界を主体的なものとして認識しようとしているのである。作品享受の過程においては、例外なく起ってくるものであるが、作品を実感する(いかえれば、作品を感動的に享受する)ことの、素朴な働きかけであるということが出来る。ただこの場合次のような感想には注意せねばならない。

○自分には忘れえぬ人がないから、ピンと来ない。(男、一次)
○私には大津のような体験があるから、よくわかる。(女、一次)
つまり自己の直接経験のみで、わかる、わからないを言っているのは、狭い享受のしかたであって、自己の体験を越えたところで、鑑賞享受ができるよう指導せねばならぬ。

第四に気づいたことは、作者と登場人物(主人公)との混同とい

うことである。(たとえば第二次、C(3)ハ)これはこの作品の私小説的特質からきていることもあるが、一般に読書感想文を書かせてみると、よくみられることである。読者が小説を読む際に登場人物の中に作者を見るのは、単なる誤解、錯覚というよりも、読者が作品を作者の生き方の直接的反映であると、素朴に考えているところから来ているとは、言えないだろうか。

もちろん、歪んだ受けとり方は是正せねばならぬが、読者が作品を通して作者を思いやりつつ作品を読んでいることを示していると言えよう。第一次感想の、「作者は感賞がすくなく、感受性の強い人だろうか」「作者は美しいイメージ(ママ)をもち、孤独な人ではないだろうか」「作者は孤独で純心(ママ)で自然にひかれてから、素的な小説が書ける」というごとき感想は、作品を通して作者像を思い描き、ひいては作者の能力にまで考え至っていることを示している。これは何を意味するものであるか。読者が作品世界を通じて、作者と作品とのかわりあいを考えようとしている姿を示すものではないか。たとえば、最後の「素的な小説が書ける」というのは、作者の能力ひいては、作品の価値評価にまで意識が及んでいることを示している。

「作品を批判的にとらえたもの」というのは、多分に問題があると思うが、「自然描写がうまい」という批評は、作者が「感賞がすくなく、感受性の強い人であり、豊かな想像力と純真な態度と人生の孤独にふれて、自然にひかれる」という認識の上に立って出てくるものといえないか。

第一次感想から第二次感想への推移過程の分析

第一次感想から第二次感想への展開過程を分析してみると、おお

よそ、次のようなタイプに分けられるように思う。

(1) 第一次感想を第二次感想に、必ずしも授業を媒介とせず、深化させたもの

△例1、S・女V

(第一次感想)

作者の言っている、忘れようとしても忘れられない人、果して私にそのような人がいるだろうか？ チョット考えてみたがすぐには頭に浮んで来ない。作者は「世間一般の者にそういう人があるとは言わない」と、言っているが、この忘れ得ぬ人を読むと作者は美しいイメージを持った孤独な人物のように思われる。それゆえ世間一般の人が持たない忘れ得ぬ人を持っているような気がする。

(第二次感想)

忘れてかなうまじき人、これはこの世で生活している人全部の心に存在するものである。しかし、忘れられない人は人間だれの心にも存在するものではない。私は性格による物だと思ふ。なぜならばほとんどの人間は一時的には何の關係もない他人を意識するが、その意識した人間と自分との間に何らかの共通点があった場合、そのことを永久に心にとどめておく人と、すぐ忘れる無神経な人があり、後者の場合には忘れられない人というものはできないことになるからである。又この作品では独歩の経歴を大津に託したものであるが、作家である彼には青年時代から物を注意深く見る目があったから人の心にはない様な忘れられない人ができたのではないか、そして私は忘れられない人が心に存在する人は神経が細かく孤独な性格の人だと思

う。青年時代に「生の孤独を感じ人をなつかしく思う」ことは長い人生において貴重な経験だと思った。

(2) 第一次感想を授業を媒介として深化したもの

△例2、Y・男V

(第一次感想)

「忘れえぬ人々」の最後に「秋山」でなく「亀屋の主人」と書いてあったが、これは秋山とはいろいろなことを論じあったり話したりしたので静口の旅宿ではじめて会った秋山との交際は全く絶えてはいるが、秋山の場合は友だちとして、忘れてかなうまじき人として考えることが出来ると思う。「亀屋の主人」の場合はまったく他人として印象に残った人であるから「亀屋の主人」が「忘れえぬ人々」の最後の人になったのではないかとおもふ。

(第二次感想)

前の感想文を書いたときは忘れえぬ人々の最後に秋山でなく亀屋の主人であったということがなぜかと思つて考えて秋山はいろんなことを論じたりしたので、友だちとして忘れてかなうまじき人であり、亀屋の主人は二言三言話しただけでその方が印象にのこつたからだと思いたけれど、そうではなくて亀屋の主人のおかれていた状態やその他ふんいきが大津の生の孤立とかさういうものに対して印象深かつたので忘れえぬ人々の最後になったのであると思う。

(3) 第一次感想に何ら問題意識のないままに授業に吸収されてしまったもの

△例3、S・男V

(第一次感想)

作者国木田独歩は無名の文学者大津弁二郎を通して、瀬戸内海通いの汽船で見た寂しい島かげの小さなあざさっている人や、熊本から大分へと九州を横断した時の二十四・五かと思われる屈強な若者が、手綱を引いてぼくらの方を見向きもしないで通って行った、夕月の光を背にした横顔、たくまじげなからだ、溝口の亀屋の主人の姿など、自然のまま自分にかんじしよせずにいきていく人、それを時によりなつかしくすぎさった事柄を思い出させる。このような人を「忘れえぬ人々」と思う。

(第二次感想)

この無名の文学者大津のように「忘れえぬ人々」は肉体的にも精神的にもつかれ切って孤独になった時、自然の中にとけこんでいる人々、また「忘れてかなうまじき人々」は親とか子とか、朋友知己そのほか自分の世話になった教師先輩、この二つに分けられる人は少ないと思う。自分はこの大津のような気持になったことが生まれていままでない。だから自分の記憶している範囲においてこのように二つに分けられない。しかし大津のような心境になれば誰でも「忘れえぬ人々」が出来るのではないかと思う。

(4) 第一次感想が第二次感想で体験記の作文に発展したもの

△例4、W・男▽

(第一次感想)

親・兄弟・姉妹・友人などは忘れてはならない人だ。忘れえぬ人々というのは、本来は忘れてしまうような人がなげか、忘れられない、そういう人を忘れえぬ人だと書いてある。

友人でもないとするれば、どうして忘れないか、ということになるが、それは、その人々に何か特長があったのであろう。又は、行き帰りの途中にあった店の人、いわゆる見なれていた人、しかしただ見なれていただけでは、覚えていないかもしれない。やはりそこには言葉ではない心のかよひがあったのではなからうか。

(第二次感想)

これが果して忘れえぬ人となるかどうかは、はっきりしないが、ぼくが音戸の瀬戸へ音戸大橋を見にいった時のことであつた。……以下「音戸の瀬戸」を歌っていた渡船の船頭の話。

(5) 第一次感想が第二次感想で全くちがった方向にずれてしまったものの

△例5、K・女▽

(第一次感想)

忘れえぬ人々として島人や僧や馬子や亀屋の主人を書いていく。これらの人はみな大津にとっては赤の他人ばかりだ。どうしてこの人たちがついに忘れてしまうことのできない人になつたのであろうか。私は大津と同じような気持をもつたことがない。私にしたらそんな人には何も感せず、すぐ忘れてしまつたろう。大津はなぜ秋山と交際を絶つたのだらうか。どうしてかめ屋の主人が「忘れえぬ人々」に書き加えられたのだらうか、むずかしくてわからないところがたくさんある。

(第二次感想)

大津は「忘れえぬ人々」をいつ書き上げるつもりなのだらうか、それとも一生の仕事として終りのないものとするのだらう

か。

人生の問題に苦しんでいるながら自己将来の大望に任せられて自分で苦しむというようなことは一生そうかもしれないから、終りなどないのかも知れない。しかし、大津のように絶えず苦しんでいるという人は少ないのではないだろうか。

大津が秋山と会ってから二年後、大津は机の上に「忘れえぬ人々」の原稿をおいて瞑想にふけていた。

大津が瞑想にふけていた頃、大津の忘れえぬ人々はいったいどんなふうになるのかをくわらしていただろうか。

(6) 第一次感想が第二次感想で深化され、自己の鑑賞態度にまで及んでいるもの

△例6、I・女V

(第一次感想)

大津は無名の文学者、秋山も無名の画家という同じようなきょうぐうにあるので会った時から親しくなった。このように同じきょうぐうにあると気があい、知らない人でも後々までも印象にのこり、おぼえているという事は私達の日常の事にも大いにあることである。そのため作者の気持がよくわかった。

(第二次感想)

普通小説を読んで印象に強く残ったりするのは、その作品に書かれている事が自分にもあてはまり、経験してきた事であるからではないであらうかと思う。

この「忘れえぬ人々」も読みながら考えて見ると私にもそういう事があったと感じた。(中略)

この大津という人は別に空想的な人でもない人生の身ぢかなと

ころからこの忘れえぬ人々をかいている。私はこのような事はみんな経験している事でそれに気がつかないのではないかと思う。小説家はそのような事を敏感に感じそれを文章で表現し、私達に気がつかせてくれる。

小説を読む事によってふだん私達が気がつかない事に気がつく。だから小説はできるだけゆんだ方が良いと思う。

次に予定する小説学習指導の構想

「忘れえぬ人々」の感想要素および、第一次感想から第二次感想への展開過程の分析を通して考ええたことをもととして、このクラスにおいて次に展開すべき小説鑑賞指導の構想をたててみたい。「五重塔」「たけくらべ」の学習指導を予定している。

指導のねらいとして、次のことを考える。

1 素材であつてもよい、自己の感想をもち、それを深化していくということ。

2 狭い自己の体験的な世界にとどまらないで、客観的な広い視野の中で自己の感想をたしかめること。

3 確実な説みをする事。

4 感想文を書くこと。

学習活動としては、次のようなことを考える。

1 第一次感想をあらかじめ書いて提出させておく。

2 読解作業を一斉授業として展開する。

3 第一次感想にもとづいていくつかの問題点を抽出、整理して問題別グループをつくる。同傾向の問題について感想をもったものを一つのグループに集める。各グループ内でディスカッション

し、その結果を全体に発表する。

4 各グループの発表に対して一般生徒から質疑・意見を出させ、適当に整理して助言する。無理に結論は出さない。

5 各自感想文を書かせる。第一次感想文をもたせて、それを反省しながら、書かせる。

文学鑑賞は、主体的な読みの活動であるから、何よりも生徒個々の心の中に自分で感じとった想をもたせることから、出発しなければならぬ。「忘れえぬ人々」において展開した一斉指導形式では、生徒は折角の第一次感想を授業の中に埋没させてしまつて、自分なりにそれを深化させていくことができないものが多い。自己の感想を意識させながら、それを客観化していく場をもたせることが大切である。そこで、問題別グループによるディスカッションということを考えたのである。自己の体験的世界のみで物を考える生徒が非常に多いわけであるが、これから抜け出させるためにも、是非やらねばならぬことだと考える。

感想文を書かせることは、書くことによつて自分の読みとつたものを客観化し、定着させるといふことをねらいとするとともに、ここでは、第一次感想と比較しながら、自己の感想深化の過程を反省させ、ひいては、自分の小説鑑賞の方法なり、態度なりを自覚的に高めるようにさせることを意図するのである。

(広島県立国泰寺高等学校教諭)